

人類史における言語の起源

川上 幸一

司会(金)：まず、川上先生の経歴について、簡単にご紹介いたします。川上先生は、大正12年、神戸市の生まれです。京都大学理学部物理学科を経て、東京大学経済学部経済学科を卒業なさいました。その後、日本原子力産業会議の原子力発電課長、神奈川大学経済学部教授を歴任されました。現在、神奈川大学名誉教授でございます。ご著書としては、『原子力の政治経済学』、『現代工業経済論』、『原子力と国際政治』、『人類史からのロングコール』など、多数ございます。

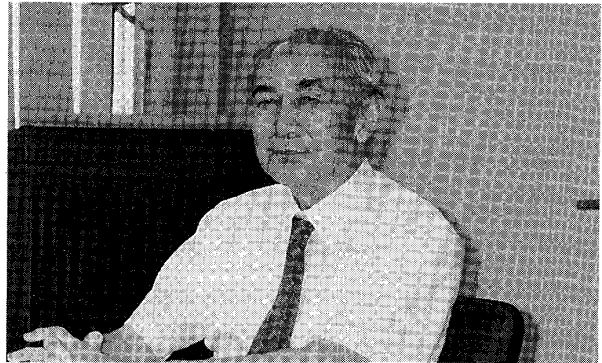
川上先生は、物理学、経済学、言語学など、幅広くご活用なさっておられます。

今日は、「人類史における言語の起源」についてご講演なさいます。川上先生、どうぞよろしく願いいたします。

ヘレン・ケラーの経験

どうも、ちょっとオーバーなご紹介を頂いて恐縮しておりますけれども、川上でございます。今、ご紹介いただいたように、私の専門は経済学ということで、言語学でも、あるいは人類学でもございませんので、今日のタイトルで私がお話しすることは、恐らくお門違いだと思われるでしょうし、事実そのとおりであります。

私がこういう問題に関心を持ったきっかけというのは、最近の経済学がモノやサービスだけでなく、知識、あるいは情報というものも、経済学の概念としてははっきり認めまして、経済的な生産—流通—消費の対象である、と



川上 幸一氏

いうふうに見なすようになってきたことでもあります。

そうしますと、モノの生産の起源というのは、御承知のようにヒトが石器を作った、石器の製作がその始まりだということがはっきりしているわけですが、それでは情報とか知識とかの生産といえる活動は、人類史のどの辺りから始まったのか、その点を明らかにしないと、経済学、あるいは経済史としての整合性がないんじゃないか。ふとそういうことを考えたのが運のつきでありまして、それから関係の文献を読むようになりまして、私なりに一つの考え方を一応まとめてみたわけであります。

まだ、一つの試論というレベルでございますので、そのつもりでお聞き願いたいと思います。細かい説明は省きますけれども、今日は、知識の起源ということではなくて、言語の起源ということでお話しするわけですが、言語と知識というのは、完全にイコールの概念ではございませんけれども、非常に密接な関係がありますので、内容的にはほぼ同じこ

とお話しするというようにお受け取り願いたいと思います。

御承知のとおり、人類が文字を発明したのは、六千年ぐらい前ですけれども、それ以前にも、もちろん言語は使われていたわけで、ただ記録の手段がなかったために、直接の証拠というものは何も残っていない。

実証的な研究ができないというので、言語学の方では、長い間、言語の起源についてうんぬんするのはタブーであるということになってきたようであります。したがって、この問題、言語の起源ということについていろいろ発言しているのは、言語学以外の分野、哲学から始まって心理学、あるいは動物学とか人類学とか、そういう方面の研究者が主に発言しているのが、これまでの状況ではないかと思えます。

それぞれの分野によって、研究方法も、あるいは使用する概念も当然違いますから、言語の起源に関する見解は分散している、非常に分散的だ、というのが私の印象でございます。したがって、どういう分野、どういう観点から取り組むにしても、言語の起源というものを考えるには、やはり何か工夫をしないと行けない、とまず感じたわけですが、これは、簡単にいえば、やはり論理的に考察する以外の方法がない、まずそれをやってみる必要があるのではないかと最初に考えたわけがあります。

私にとって参考になったというか、ヒントを与えてくれたのは、ヘレン・ケラーの自叙伝の中のエピソードでありますので、ちょっとそのことを申し上げます。御存じの方が多いと思われそうですが、サリバン先生がヘレンに言葉を教えるときに、まず人形を抱かせて、ヘレンの掌に doll, ドールと綴ったわけですね。

その次には、もうちょっと大きな人形を抱かせて、やはり掌の中に doll と綴った。これは何でもなしのことのようすけれども、人類

史における言語の発達の順序というものと非常に関係があります。まずモノの名前をつける、次にモノの名前から概念へすすむ。

その後、もう一つ、抽象観念を教える非常に印象的な場面がありまして、thinking, 思考ということ、サリバン先生が教えたときの様子が描かれています。なぜ、そのことを私が申し上げるかといいますと、大事な点がいくつかあるわけなんです。一つはヘレンが覚えた文字、あるいは言語が、触覚と運動感覚だけで覚えたコトバだということ。つまり、文字とか言語とかいうものは、特定の感覚器官に依存しているものではなく、感覚器官がたとえ制限されていても、どこかにコミュニケーションする道が、たとえ狭い道であっても残されておれば、それでコトバを覚えたり、あるいは教えたりすることができる。ということは、つまり言語というのは一つのシンボルではないか。

いわゆる言語記号説が言っているようなことを、裏付けている一つの事例じゃないかと思うのです。それから、もう一つは先程申し上げたように、言語化されていく順序、これは言語化以前からそうだったと思うのですけれども、モノの名前から概念へ、そして抽象概念へ、という一つの順序を示しているということ。そういうプロセス、サリバン先生が教えた順序を見ますと、概念化とか thinking というのは、はたして言語が存在しなければできなかったことなのかどうか。

言語以前には、はたしてそういうものはなかったのかどうかを、少なくとも私は考えさせられたわけ。これは、言語の起源というものを考える場合に、必ず付きまってくる基本的な問題の一つなので、最初に申し上げておきたいと思ったわけです。

もちろんこれには、いろいろ異論もございませけれども、私は概念化というのは言語以前からすでに始まっていた、と考えております。実証的な意味でのいろいろな研究がござ

いますけれども、言語の起源がいつ頃かということについては、50 万年から 60 万年前の化石人骨に大脳の言語領域が発達した形跡がある、あるいは発声器官が発達した形跡がある、という報告がごさいます。

それだけ見ましても、言語の起源がかなり古いということがわかるわけですが、その報告の年代からさらにどれだけ遡るのかということは、現在の考古学資料だけでは確かめようがないと思います。したがって、推理の自由というわけではありませんけれども、様々な説が出てくる。

その中には、約 180 万年前の前人アウストラロピテクスが、すでに言語、あるいは言語に近いものを使い始めていたという、そういう説もあるわけです。これは、もちろん十分な裏付けがあるわけではないと私は思いますし、一つの仮説として提起されているというふうに申し上げておきます。

言語の形成と映像記憶

以上は、前置きのようなことですが、先程申し上げたように、言語の起源ということを考えるには、やはり何かの工夫が必要であるということで、私はまず言語の構造というものを考えてみて、その構造ができるためにはどういう条件が必要だったのかと、そういうふうな問題を設定してみたわけです。しかし、ここで構造と私が申し上げたのは、言語学でいうような構造概念ではありません。つまり、音素とか単語とか、あるいは文章とか、そういう意味の構造ではごさいません。

そうではなくて、もうちょっと認識論的というか、あるいは起源論的と申し上げてもいいのですが、そういう意味で一つの構造的なものを考えてみようということになります。その構造を説明するために、私はまず、映像記憶というあまり使われない概念を使いました。

これは、先程の先生方の御話の中にも出て

まいりましたが、普通は、映像というと視覚的な、目を見た視覚的な映像のことです。しかし、ここで映像というのは、どれかの感覚器官を通過した、全ての感覚的イメージを映像と言っているわけで、それが記憶されたものを映像記憶と呼ぶことにしたわけです。

先程のヘレン・ケラーの経験を思い出していただきたいのですが、普通の人、つまり健全者にとっては、言語というものは音声です。つまり、音声の聴覚的なイメージが記憶されて、それが映像記憶として心のなかにストックされている。

私はそういうふうに、まずわりあい単純に考えたわけです。もちろん、必ずしも音声である必要はないわけですが、簡単のために、便宜上、音声ということで御説明いたします。そこで大事なものは、音声の映像記憶だけでは、まだコトバとはいえないということです。音声の映像記憶というのは、コトバの素材のようなものであると思いますので、これを《素言語》と呼ぶことにします。

資料には二重かぎを付けて、つまり《素言語》と表記しておきましたが、これは映像記憶を表す記号だと御考えいただきたいのです。その《素言語》がコトバになるためには、もう一つ、対象の側のかぎ括弧が必要です。つまり《対象》という映像記憶が必要なわけで、コトバとは何かの対象を指示するものですから、その対象というのは、どれかの感覚器官を通してそのイメージが記憶されている、映像記憶として、やはり心の中にストックされている。その二つの映像記憶、《素言語》と《対象》とがリンクしたときに、始めて一つのコトバができるのではないかと、そのコトバを使って対象を指示することができるのであろうと。

その二つの映像記憶のリンケージが、私が先程申し上げた言語の構造ということになるわけでありませう。ですから、単なる音声が言語だというのは正確ではありませんし、ある

いは発声したコトバが、直接外界の対象を指示しているというふうに考えるのも、私は正確ではないと思います。むしろ、心の中であらかじめリンケージが成立していて、それが成立したときに、指示するとか、指示されるとかという関係がはじめて構成されて、そういうことが可能になる、つまりそのコトバを使って対象を指示することができる、そういうふうに私は考えたいわけです。

研究者の中にも、音のかたまりが単語である、あるいは文章であるというふうに書いている人がいます。しかし、これは私は明らかに間違いだと思います。音のかたまりというのは、どこまでいってもやはり音である、コトバではないと私は思いますし、そこをリンケージという概念で補ったわけです。

リンケージというのは、これは、心理学的にはまた別の表現があると思うのですが、広く考えますと、心の中にはいろいろな感覚的イメージ、感覚受像とか知覚とか、あるいは私が言っているような映像記憶とか、そういうものの中に絶えずリンケージとディスリンケージが起きている。ディスリンケージというのは、どうも本来の英語ではないようですが、ここではリンケージが解除されるという意味です。

そういうことが絶えず起きているのが、心の運動の姿であるというふうに考えられます。ただ、そういう一般的なリンケージは、発生したり、また消滅したり、そういうことを絶えず繰り返してるわけで、短時間しか存在しないものです。それに対して、言語のリンケージというのは、固定的であって、持続性がある、次の世代にも継承されるということですから、これは一般的なリンケージとは、知的能力の働きとして当然区別すべきであるというふうに考えます。

つまりコトバを作るリンケージ能力というのは、特殊な知的能力であって、この能力が、大脳の進化によって形成されたと言うと、そ

こにまた問題が出てくるのですけれども、一応そう言わせてもらいますと、大脳の進化によってリンケージ能力が働くようになったときに、始めて言語の形成が可能になった、これがまず、言語形成のための第一の条件じゃないかというふうに思うわけです。

もちろん、言語が形成されるためには、聴覚器官とか、発声器官とか、そういうものの進化が当然必要でありますし、従来はその方がもっぱら言語の形成の条件として言われてきているのですけれども、私はどうもそうではないんじゃないか。つまり、発声器官とか聴覚器官の進化というのは、先程から申し上げている音声の面のことで、《素言語》を形成するための条件みたいなものであって、コトバというものの全体に関していえば、やはりリンケージ能力のような心理的な働きといえますか、心理学的な能力の方が大事なんじゃないかと私は考えております。

心のなかの生産活動

次に、そのことを経済学的な観点から見ますとどういうことになるか。経済学的に見ますと、このリンケージ能力というのは、一つの作業をしていると考えられます。つまり、普通の手や足を使ってする作業とは違いますが、心の中での一つの作業を行っている、その作業能力であるというふうに解釈することができます。

つまり、《素言語》と《対象》という二つの映像記憶をリンクして、映像記憶の合成物を作っている。合成という表現は、これは心理学的な働きには不向きだというように御聞きになる方もあるかと思いますが、経済学的な観点からいうと、これはやはり合成であって、加工作業の一種である。その産物が合成物としてのコトバであるという、そういう見方ができるんじゃないかと思います。

そこで、さらに勇敢にもうちょっと議論を進めますと、言語の形成が始まったときに、

心の中ではもう一つの生産活動、これは心理的な性格のもので、心の中での生産活動、心のなかの秩序の生産と実は言いたいところなんですけれども、そういうもう一つの生産活動が始まった。そういう見方が成り立つ可能性があるんじゃないかと。ただし、今日は詳しく申しませんが、ここで生産活動という言葉を使うのは、実は少し飛躍があります。モノの生産の場合は、生産活動の始まりというのは石器の製作だということがほぼ定説でありますけれども、それと比べた場合に、心の中でコトバを作るという活動を同じ意味で生産活動と定義できるかどうかということにはちょっと問題がございますので、そのことを御断りしておきます。しかし、それにも関わらずあえて言わせていただきますと、石器作りの経験から生じたといいますか、道具行動と言語行動との間の相似性ということからみて、この石器作りの経験を何十万年か重ねていくうちに、そこには当然知的能力のパターンが形成されたわけですから、そのパターンを受けついで、同じような加工作業、あるいは生産活動的なものが心の中でも可能になったのではないかと、私は考えたわけがあります。

これは、もう少し厳密にいきますと、石器作り、あるいは道具行動において形成された知的活動のパターンが、言語の形成過程にも働いているような気がいたします。同じ知的能力がコトバを作る作業能力としても働くようになった、そういう関連性というか、継承関係があるのではないかと、一つの仮説

ではありますけれども、そういう仮説を一つ立ててみたわけです。それを、対比表(表1)のような形で資料にも示しておきました。

この表は今申し上げたことを、もうちょっと広げた道具行動全体、あるいは言語行動全体の対比表ですけれども、どちらも三段構成の構造になっているわけです。道具行動の方は、原石やハンマーストーンを用意する準備段階の第1段、それを基にして石器を製作する第2段、そして第3段でその石器を使って狩猟をしたり、防衛をしたりする。

そういう三段構成の道具行動になっている。それと対照して、言語行動の方を考えますと、これはもちろん内容は心理的なもので、道具行動とは違いますから、その違いは一つ頭に置いていただいて、その上で、言語行動の第1段は《素言語》と《対象》とを準備する段階、そして第2段で、それらの素材を使ってコトバ作りのリンケージ作業が行われる。ある条件が熟したときにそういうことが可能になる。

それから第3段で、コトバを使用して、つまり発声してコミュニケーション行動を展開する。そして、それぞれの各段の性格が道具行動の各段と一致している、基本的な性格が一致しているというふうにみることができると私は思うわけです。道具行動の場合は、この三段構成ということにはとても意味があるわけでありまして、それまでの動物的な次元の道具行動というのは、私は二段構成だったというふうに考えております。二段構成というのは、簡単にいうと加工段階、つまり先程

表1 道具行動と言語行動との比較

	道具行動	言語行動	備考
第1段	原石とハンマー石の準備	《素言語》と《対象》との準備	生産の準備段階
第2段	石器の製作作業	コトバづくりのリンケージ作業	道具の加工段階
第3段	産物の石器を使用する狩猟や防衛	コトバを使用するコミュニケーション行動	最終目的行動の段階

の第2段がないという意味です。

今までは、今まではというよりもちょっと前までは、製作行動をするかしないかということで人と動物との行動を区別していた、そういう時期があったわけです。ところが、いろいろ動物の生態観察、チンパンジーなんかの生態科学が進んでくると、彼らも結構製作活動をやっているということがわかってきたので、製作ということを基準にして人と動物とを区別することができなくなってきたわけです。

それでは、人と動物とはどこが違うのかというと、石器作りがまさに分岐点であるということは変わっていないと思うんですが、石器作りというのは、石で石を割る、つまりハンマーストーンを使って石を割る、あるいは石同士をぶついたり、台石を使ったり、いろいろやり方がありますが、要するに道具を作るために、石器という道具を作るために別の道具を使っている。

この道具を工具というふうと呼ぶと、現代的なニュアンスが強すぎるんですけども、やはり道具を作るための道具ですから一応工具ということにします。ハンマーストーンは工具だというふうにいいますと、それを使っているか使っていないかということによって、二段構成の基礎道具行動と三段構成の連関道具行動とを区別することができるのではないかと思います。

そこで、そういう意味で人類が動物的なレベルから離陸したということが非常にはっきりしているのが、やはり石器の製作を始めたときであるというふうに思うわけです。それに対して、二段構成の基礎道具行動というのは、単に自然物を利用しているというだけではなくて、身体的な能力、身体器官を使ってできる範囲の、ある程度の加工作業もしている、それが、二段構成の基礎道具行動の段階ということになります。

これは、人間の場合も、動物の場合も同じ

で、前人アウストラロピテクスのレベルというのは、まさにそのようなレベルであったわけで、そういう状態の中から、いわゆる後期前人のハビリスの時に石器を作るようになった、工具を使うようになった。そういうことが始まったというふうに見ることができます。

言語化と個体の自立性

以上に申し上げたのが、だいたい私の基本的な観点なんですけれども、いろいろ問題はあると思いますが、以上を前提にして一応お聞き願いたいと思います。

今申し上げたことを、言語の構造に関してもう少しふみこんで考えてみようと思います。いろんな問題がありますので、非常に単純化してお話している面がありますけれども、言語が形成されたということは、人というのは集団性の動物だったわけですから、一つの集団の中で共有されるコトバができた。

そして、それが使用されるという、そういう意味ですから、そこで、《山》というコトバを例にとって、図1に示しておきました。要するに、ある個体Aが発声をして、別の個体のBがそれを聴いて、それが山を指示しているんだということを理解する。

今度は、それとは逆に個体Bの方が発声をして、それを個体Aが聴いて、やはり山を指示しているということを理解する。そういうことが、個体A、個体Bだけではなくて、個体C、個体Dとの間でも成立するようになったときに、初めてそこに一つのコトバが生まれたということが、つまり集団の、共有のものとしての一つのコトバが生まれたということがいえるわけです。

このコミュニケーション・プロセス、これは経済学の方でもちょっと問題になるわけですが、最初の発信者が持っていたコトバ、個体AならAという発信者が持っていたコトバ、あるいは映像記憶の合成物というものが、

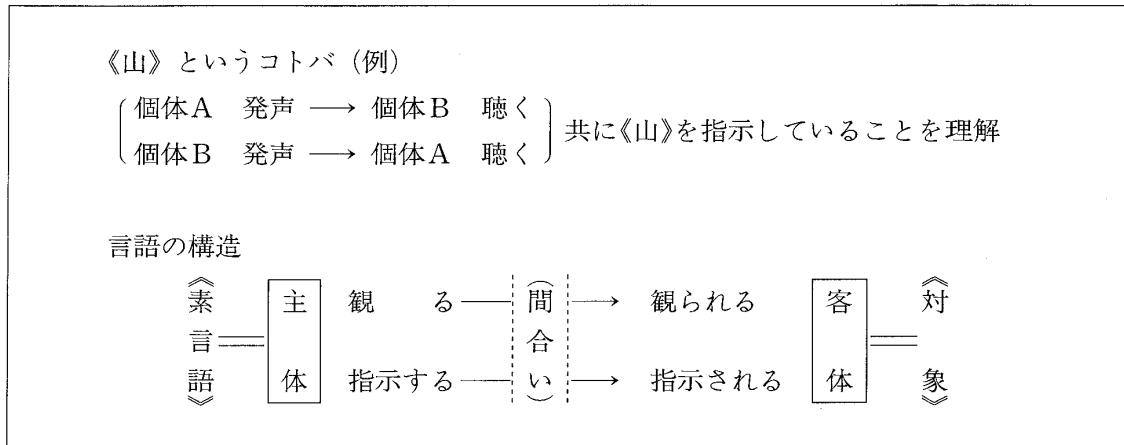


図1 言語の構造

音声を媒介にして、受信者の心の中に、これは経済学では再生産されるというふうにいうのですけれど、再生産されるのがコミュニケーションです。

なぜそういうことが可能かということは、いろんな背景の問題がありますけれども、一応そういうふうに理解をしています。それが、コミュニケーションの本質だと理解しておりますし、これは経済学的にいきますと流通の概念に相当するものでもあります。

それで、言語の構造ということ、もうちょっと踏み込んで考えてみたいんですけども、これは先程から申し上げているように、映像記憶の合成物としての構造として考えますと、図1に示してありますように、《素言語》と《対象》とが向き合う関係になっている。

リンクしているということは、お互いが向かい合っている関係にあるということで、その片方が主体であり、もう片一方が客体という立場にある、そういう構造がそこにできている。《素言語》の方からは《対象》を観る、あるいは指示する、《対象》の方は、観られる、指示されるという立場にあるわけで、これを主体と客体というふうに表現したわけです。

《素言語》が主体であることには、また、主体であることのいろんな理屈を立てることができるんですけども、要するに必要なときにはすぐ音声に変換される。これは発声器官

と直結しているわけですね。それから、新しいコトバを作ろうとする意思も、当然《素言語》の側から働いているというふうに見られるわけです。そういう意味で、《素言語》の方が主体的なものであるというのは確かであろうと思います。

それから、表の中間の所に点線で「間合い」と書いてある所は、これは私はどのように心理学的に説明すればよいのかがよくわかりませんが、やはり意識の発生とか、人によってはそれを思考の発生と結び付ける人もあると思いますが、そういうことと関係のある一つの間合いができています。この間合いが持っている意味というのは、非常に大事でありまして、この間合いができたことは、人と《対象》との関係が変化したことを意味しています。

つまり、外界からいろんな刺激がくる。それに対して、ただ受け身、受動的に反応する、あるいは条件反射的に反応するだけではなくて、ある程度自主的に反応する、反応という言葉を使うとまた問題が出てきますが、要するに自主的に対応する。

その自立性みたいなものを表しているのが、この点線の間合いであって、この心理的な間合いの中にそういうヒトの自立ということが含まれているのではないかと考えているわけです。その間合いを隔てて、お互いに観

る、観られるという関係が生じているのだと思います。

そういう外界との関係の変化という意味で、私は間合いの問題が非常に大事だと申し上げたわけです。

自立性が始めて生じたという意味では、これは当然先程から何度か出てきました石器を作り始めたということが、外界との関係が変化した最初のステップであったわけですが、それが、次の段階としてコトバを形成するという点において、もう一つ自立する方向への一歩を進めたというふうに考えられると思います。

概念化と関係認識

その思考の発達とか、意識の発生とか、そういう問題になると、話が脇道にそれることになりますので、それはやめておきますけれども、《素言語》と《対象》との図示した関係について、もう少し申し上げることにします。これを歴史的に考えますと、歴史的にというのは《素言語》が形成されたり、《対象》が形成されたりした時期、そういう歴史的な面から考えると、実は《素言語》が主体、《対象》が客体という立場が逆になってしまうわけで、《対象》の方が《素言語》よりずっと古いわけですね。

これは、進化の歴史と共に古いと言ったらちょっと言い過ぎかもしれませんが、《対象》の映像記憶というのは非常に歴史が古いわけです。そういうものは、もともと人の心の中に映像記憶として蓄積されていたわけなんですけれども、《素言語》というのは、いろんな条件があって、その条件が熟したときに初めて形成されるようになって、そして、それが《対象》にリンクしたというふうに考えられます。

したがって、コトバができる前から、すでに《対象》の特性であったものは、言語ができたときに、当然言語の特性として受け継が

れたはずである、継承されたはずである。そういうふうに考えるべきではないかと思えます。

では、《対象》の特性であったものとは何か、言語ができる前から《対象》の特性であったものは何かということになると、これについては哲学、その他の関係分野からの見解がいろいろあるのですけれども、私はやはり概念化ということは、当然言語以前からすでに行われていたことというふうに考えたいと思います。

つまり、概念化というと、いわゆる主知主義的な哲学が出てきてから、我々はその影響を受けているわけで、何かこう言語で定義したり、属性をいろいろ並べたり、そういうことをしないと概念じゃないという、ちょっと常識化した考えがありますけれども、そうじゃないのではないかと。

概念化しないことには、人だけでなく、動物も生きられなかったんじゃないか。つまり、個々別々の感覚映像とか映像記憶というものが、どんどん入ってくるだけで、それが全然整理されなかったとしたら、これはおそらく対応しきれないというか、生活ができないわけです。天敵が近づいたときに動物が警戒音を発するわけですが、そういう警戒音も、天敵の種類によって発声が違っている。

それを聴いた仲間は、ちゃんと天敵の種類を判断してそれぞれに違った待避行動をとっている。そういうことが観察されております。これは、やはりそこに一つの概念化が行われているというふうに考えたいわけです。

もう一つは、これはあまり言われなことですけれども、これも私がなまじっかな言い方をするといろんな問題が出てくるのですが、認識というのは基本的に関係認識であるというふうに考えられるわけです。つまり、何かを認知した、認識したという場合に、ある対象そのものを認識したように思うのですけれども、それは周りのものから実は識別し

ているわけですから、これは基本的には関係認識なんではないか。

そういう性格を、もともと言語以前から映像、映像記憶というものは持っていたんじゃないかと思うわけです。

その二点だけ今日は申し上げておきますけれども、そういう《対象》の特性というものの、映像記憶の特性というものを受け継いで、そしてそこからさらに言語が発達していくという順序ですすんでいった。ですから、言語以前のこういう《対象》の特徴というのは、人だけではなくて動物でもそうであったと考えて大きな間違いはないと思います。

次は、言語化された後のことです。《対象》の映像記憶が《素言語》とリンクされて言語になった、コトバになった。そこから言語の発達が始まるわけですが、初期の発達というのはどういうものだったのかを考えてみますと、次々に新しいリンケージができて、コトバの数が増えていくのは、これは当然のことです。

それに伴って観る、観られるという関係を先ほど図示しましたが、そこに一つの間合いができたことによって、今までと違って、《対象》がさらによく観られるようになる。したがって、その《対象》がすでに概念化された映像記憶であったとすれば、これは概念の内容というものがより明瞭になってくる、まずそういうことになるだろうと思います。

言語の初期の発達はそこら辺から始まったんじゃないか。それから、もう少し言語が発達してくると、概念と概念とをグルーピングして、上位概念を形成する段階がやってくるんじゃないかと思うわけです。

それから、その次の段階というのが、と言っても、あまり次の段階とか前の段階とかいう区別はしない方がいいと思うんですが、先程申し上げたように、言語化以前から関係認識というものが映像記憶の特性としてあった。それをベースにして《対象》と《対象》との

間の、関係そのものを表すコトバというものが作られてくる。そういう一つのステップがあったのではないか。これは、明らかに言語が文章化していく段階の始まりというふうに考えられますけれども、映像記憶の特性であった関係認識の発達だと私は思います。

それで、言語の起源がどの辺りにあったのかということは、簡単に結論の出せる問題ではないのですが、今、道具行動との関連で申し上げたことが、実は道具行動、つまり石器作りが始まった、生産活動としての道具行動が始まったのと、言語の形成とのどっちが先かという問題に対して、私なりの一つの答えは出しているつもりなんです。道具行動のいろいろなパターン、知的、心理的なパターンが言語行動に継承されているとすれば、当然、石器作り、道具行動の方がやや先行しているということになります。

社会の形成との関連

それと似たような意味で、もう一つこういう起源論で必ず出てくる問題は、社会の形成との関連はどうか、ということで、これが、また非常に厄介な問題なんです。

社会の形成の問題というのは、社会的なものとはいったい何かということがまずあるわけですが、社会の形成の際に何等かのコミュニケーション手段が、はっきり言えば言語というものが存在した、あるいは必要だったということについては、これは、不思議なことにとすると語弊がありますが、だいたいどの説でもその点は一致しております。

社会が形成されるためには、何らかのコミュニケーション手段が存在した、恐らく言語が存在した。ただ、人によって言語ということの表現がいろいろ違っておまして、言語という人もあれば、音声言語という人もありますし、聴覚的言語という人もあります。それらは皆同じなのかなと、私などのようにはたから入ってきてみますと、疑問をもつわ

けです。

例えば身振り言語の場合も、叫び声とか、呼び声とか、そういう音声を含めて身振り言語と言う場合と、音声とは区別して使う場合とがあるようですが、身振り言語というのは言語に先行しているわけですが、いろいろな表現される言語は、身振り言語との違いがどうもはっきりしていないんじゃないか。何となく身振り言語から言語へと移行していったという感じを受ける。そういう説明をかなり見うけるものですから。

したがって、そういうことでは、社会の形成がいつ頃だったのか、そういうことの答えも明確には出せないことになるわけです。ただ、今、申し上げたように言語が必要であった、社会の形成の際には言語が必要であったという点では、その言語の内容はともかくとして、いろんな説の立場は一致しているわけですから、その点からいえば、やはり言語の形成の方が社会の形成よりもやや先行したか、あるいはほぼ同時に進行したかのどちらか、論理的にはそういうことになるわけですね。

ただ、非常に困ることはですね、私がただ困っているだけなんですけれども、社会の形成の条件とか、あるいは言語の形成の条件とかを考える場合に、社会的行動というのはいったい何なのかということに、私のように社会科学をやっている人間は非常にこだわるわけです。

これは、別に社会的と生物学的なものとを、カテゴリー的に区別してしまおうというような考えじゃないんですが、やはり人間が社会的な行動を始めたとか、社会的関係が、社会的なしくみが初めてできたという場合には、何をもって社会的というのか、そのことを明確に示さないといけないんじゃないか。いけないと言うよりも、私が満足できないんですけど。

例えば、潜在力説というのがあります。潜

在力説というように一つのグループを作ってもいい諸説があります。要するに、人類には潜在力があったのだと。つまり、言語を形成するような潜在的素質、潜在力と言うよりは、潜在的素質と言った方がいいかも知れませんが、その素質をもともとは持っていたんだと。そういう説明をする人があります。

その素質が、ある段階で表われて言語の形成に至ったのであると言うんですけれども、そうしますとですね、これは生物学的な進化の延長線上で、いつのまにか社会的なものが形成されたということになる。もちろんいつのまにかというのは少し言い過ぎで、例えば生物学的な観点からは、いくつか理由を挙げることができるのだと思うんですが。しかし、この潜在力説というか、そういうことを唱える人はさらに進んで、倫理観念が芽生えたということまで言うわけですね。

社会が形成されたのですから、当然倫理観念が芽生えただろうという。そういう調子でどんどん推理を進めていくわけで、どうもその辺がそう簡単に先にいってもらっては困るなという気がするわけです。これは、一つ一つが非常に大事な問題なので、そういうことは、やはり、もう少し条件というか、何をもって社会的なしくみとするのか、ということをも明確にしないとイケないんじゃないか。

こういう潜在力説で行きますと、前人アウストラロピテクスが、すでにもう社会を形成するか、ほとんどそれに近い状態に達していたという話にもなるわけです。私などは、そういう仮説を本当に受け入れることができるかと疑問に思うわけです。やはり、現代人の現代的な観念を持ち込んでいるのではないか、そういう気がして仕方がないわけです。要するに、そういうことでは、科学的研究のテーマではなくなってしまうというか、人だけが言語を形成したり、社会を形成したりすることができたのは何故かという点の説明を省いているという印象を、私は否定できない

わけです。

それでは、お前はどのようなふうに説明するのかと言われると、まだ道半ばですから、今日は十分御説明することができませんけれども、進化論的に考える面と、石器の製作のように、進化に依存しないような行動を人類が始めた面とをどういうふうに関連づけるか。石器作りから始まって、言語の形成というのもそういう人類的な行動だと思いますし、社会の形成もそうじゃないかと思うんです。そういうことが問題だと、私は考えているというふうに申し上げておきたいと思います。

先程も申し上げたように、この問題は簡単に結論が出せないわけですが、私の今の目標としては、言語の起源というような問題は、言語行動の中だけで考えるのではなくて、道具行動、あるいは社会的な行動との関連で、その間の知的能力というかそういうものの発達とその継承関係というものを明らか

にしていく。そういう方法をとるしかないんじゃないか。

そういうことで、だんだん形成の時期というものも絞られていくだろう、と考えているわけです。今、申し上げたことに、また補足を加えることとなりますが、一つの大きな問題は今申し上げた、生物学的な観点というか、あるいは動物学的な観点というか、そういう観点から出されている見解と、社会学的な、あるいは社会科学の観点から出てくるものとの折り合いをどういうふうにつけていくのかという、そういう問題であるというふうに感じております。

丁度、時間になったようですが、ちょっと畑違いの、経済学をやっている人間が、割合勝手なことを言わせて頂きましたので、御批判はいくらでもお受けいたしますから、御意見をぜひ伺いたいと思います。

川上講演に対するコメントと質疑

司会(金)：ご講演ありがとうございました。質疑に移りたいと思います。ご質問・討論お願い致します。

狩野：補足的な形で伺えるといいのですが、この場合、最初のヘレンのことでございますけれども、その時に一番この中で劇的だと考えられる体験は、誰でも知っている、ヘレンがポンプ小屋で、サリバン先生が噴き上げたポンプの水をサーッと流しているその手のひらに WATER という文字を書いたというところ、その時に、本人はそれまでそのような触覚は知っているけれど、それと何が関わっ

ているのか、それはぜんぜん分からないで、苛立ったり混乱していたと、その時に、いま手の平をほとぼしって流れている物と、先生が自分の手のひらに WATER と記した、それが結びついたという。それはもう大変な喜びというか歓喜の状態、本人はそれが転機だと自伝では言っているようですが、その Aha 体験の場合、川上先生の言葉からこのままで字面的に申しますと、いわばその手の平に書かれた触覚的なパターンというものは《素言語》になるのか、それから、流れている水はいわば《対象》ということになるのか、

その間の何か関わっているあり方がリンケージとなるか、どうなるのかがちょっとひとつ分からないのです。果たしてそれが分かったというヘレンの劇的な歓喜になるだろうか問題になります。自分の中にあるこの触覚として現れているものがサリバン先生も持っていて、それで同じように感ずることができるという、一種、自分がもう孤独でないんだという、そういう共有しているという感じになるかと思います。先生が最初の段階で映像記憶の概念をお出しになった時に、やはり、何かこの体験の共有性、社会性というものがどんな形で入って来るのだろうか。ヘレンが分かったというその劇的な体験をする、それは、その学説からどう定位されるのでしょうか。

川上：いや、それは非常に痛いところを突かれましたね。最初におっしゃった質問は何でしたか、リンケージですね。リンケージについて、先生の言われた意味がちょっと正確につかめませんでした。

狩野：つまり、この触覚として WATER と書いたものが言葉だと分かってないわけですけど、それは先生の概念では《素言語》とでもいうべきものなんだろうかということが質問なんです。

川上：ああ、わかりました。それはやっぱり《素言語》というべきものだと思います、そのヘレンの手の平に書かれたものはですね。ただ、確かに音声ではないわけですが、ヘレンにとってはそれは《素言語》だった、言葉を覚える第一歩だったわけです。そういうことは当然言えると思います。それからもう一つは《対象》ですね。

狩野：流れる水の間接性というのは《対象》。

川上：それはもう当然《対象》ですね。それは感覚的に受け入れられ、記憶されたものです。

狩野：そのリンケージというのが、いま言ったように自覚という形で喜びになるような、そういうあり方は特殊な場合だと思います

が、いまの場合は何が喜びの源泉になったのか、本人もわかっていないんですから……。

川上：それはそうですね。その喜びっていうと感情的な問題がひとつ入ってきます、私はまだ、そこまで広げて考えてはいないんです。

狩野：「わかった」って言ってますよね。「わかった」っていうのは何でしょうか。

川上：「わかった」というのは、《対象》が《素言語》に対応することがわかったということですね、まず。その二つが対応するんだなという、これがコトバというものの最初の認識だと思うんですが、その上にさらにサリバン先生との関係とか、そういうものまで含めていきますと、これはかなり広い問題になります。これは心理学的には当然そういうことをお考えになると思うんですけど、私はさし当たり認識論的に考えていて、そこまでは踏み込んでいません、正直に申しまして。

狩野：ただ、その言語というものが、それが何かで使う段階で個人の中に社会が広がる、世の中が広がる、そういうかたちで組み込まれてくるので、先生が考えられるような《素言語》というものには何かの形で社会性が内蔵されているのではないのでしょうか。

川上：言語の社会性は当然あると思いますね。ただ、先生がおっしゃっているのは現代社会をお考えになっているという風にも受け取れますが。

狩野：いや、もっと基底的な原初的な体験であっても、又あの、サリバンとヘレンとの間のような素朴な、二人にも……。

川上：素朴ですけれども、ヘレンというのは実は現代人なんですね。言語的な潜在的素質を十分に持っている女の子です、ヘレンは、それは5歳か6歳までに学習をすれば、ちゃんと言語領域が脳に形成される、そういう素質をもった女の子ですね。ところが、起源論で考える時は、原人というのはぜんぜん違う、言語の経験がまだないわけですから。

狩野：だいたい容量はどのくらいのところで

すか。700 立法センチメートルぐらい……。

川上：ああ、脳の容積ですか。

狩野：1500 ぐらいのところですか。

川上：それは前人と原人とでだいぶ違います。前人はだいたい500 ですね。それから原人になってくるとぐ〜んと大きくなります。900 から1000 ……。

佐倉：ちょっと私から説明します。前人というと、普通は猿人と言っておりますが、これにもかなりの時間的な幅がありまして、いまはもう400 万年ぐらい前までのものが発見されており、新しい方でも100 万年ぐらい前までで、だいたいその間に3つぐらい種があります。一番古いのはアファール猿人で、これはまだほんのすこししか見つかってないので、標準的な脳の容量は分かりません。その次の小形猿人、それから一番新しい大形猿人、これはかなりの個体数が見つかっておりまして、小形猿人はだいたい200 万から300 万年ぐらい前に出てきて、大形のほうが100 万年から200 万年前に出てくるのですが、その間には脳の大きさに割合い明瞭な差がありまして、古い方の小形猿人では、もちろん個体差はありますが、大部分は500 ml 以下で、大形猿人になりますと550 ml 以上です。一番大きいのは700 ぐらいあります。その次の原人の段階になりますと、だいたい1リッター、1000 ml を中心として、小さいのは800 から大きいのは1200 ml ぐらい、その間にばらついていきます。その次の旧人になるとほとんど現代人と同じで、平均すると中心はだいたい1450 ml ぐらいです。個体差は大きく、特に現代人では多数が調べられていますから、例外的なものもみんな含まれており、非常に小さいものでは1リッターぐらいのや、大きいものでは2リッター近いのがあります。以上は頭蓋容積の値ですが、脳は頭蓋容積よりも幾分小さいけれど近いですね。そんなところです。

川上：それでもうひとつの質問、あとにおっしゃったのは何でしたか。

狩野：ええ、それはさっきも言いました喜びが何が原因なのか、ヘレンは高級だっておっしゃいましたけれど、粗暴な状態で何が何やらわからないあり方から、そこでやはり自分が孤独でないとわかる。それが指し示しているものが先生の中に共通にある、共有しているのだということだ。《素言語》というものが何らかの形で使われる基本はやっぱり共有ということなのじゃないかという問題になります。

川上：それはおっしゃる通りじゃないでしょうか。それはおそらくもっと言語以前に溯ってもそのようなことが言えるんじゃないでしょうか。いわゆる叫びのような段階でもそれは共有されています。共有されなければ言語とは言えません。

司会(金)：阿部先生どうぞ。

阿部：あの、最近テレビその他で非常にポピュラーな話題になってますが、スー・サベージ・ランボーという人がピグミー・チンパンジー、「カンジ」という名前になっておりますけれども、ああいうのを先生のお考えの中で位置付けるとすると、たとえばどんな風になるのでしょうか。

川上：位置づけと言われたのは、具体的に言いますとどういうことですか。

阿部：人間と同じように小さい時から育てるとか、そういう試みは言語の習得という意味で、夫婦の心理学者で有名な何例かはありますが、ごく最近のは、ピグミー・チンパンジーという……。

川上：オノだとか、ボ何とか、数種類どこかにいる……。

阿部：仲間のそばにいて、やっていたら、自然に非常に習得してですね……。

川上：言葉をですか。

阿部：人間のですね。もちろん発声は発声器官のハンディとかありますからできませんけれども、スー・サベージ・ランボーの言うことをかなりよくわかって……

川上：人の言うことがわかるというわけですね。それはかなり、例があるんじゃないですか。

阿部：実は、いろいろな歴史があるのですけれども、その言語学習の歴史ですね。音声言語はもちろん発声人間と違うのでできないので、プラスチックのサイン器具を使ってやらせるとか、手話でやらせるとか色々ありましたけれど、やはり相当限界があって、資質的に違う、種によって違うという風に、つまり生まれた後の学習環境とか学習の問題ではなく、種としての、先生の言われた言葉で言いますと、潜在的素質ですか、進化の履歴が違うという風に言われていたのが、もうちょっと、やれる種が出てきたと。少し前に、もっと人間のようにわかって習得できる、それがかなり、一般的話題としても有名になってきてるのですけれども、そういうのを先生のお話にいれるとどうなるのかなと思ってちょっとお聞きしたわけです。もうひとつついでに、これも聞きかじりなのですが、カナリヤ類のアトリと言うような鳥の発声のコントロールが一側性になっているというのは解剖学的に知られています。つまりあの、小鳥のさえずりが、神経的には両側的に大脳半球からの支配、ほとんど一側的な支配になっている。それも左側となっている。人間の場合、言語処理の大脳皮質の領野は左側となっている。98%ぐらい、種を問わずですね。そうすると、何かそこにあの、鳥のさえずりでさえずね、一側的にコントロールされていると、で人間のと鳥のコミュニケーションのレベルは違うし、シンボルマニピュレーションのレベルも全然違うとは思いますが、そこに連続性を見出したくなるような気持ちもあると……。

川上：連続性というのは大きな意味では当然あると思いますけれども、また、あまり動物とヒトというものに完全に境界線を引いてしまうのもおかしいけれども、しかし、そう言

いながら一方で、やっぱり言語とか社会とかいう場合には、そのことをきちっと、何がいったい言語なのか、何が社会なのかということを確認にしないといけない。今までその点は明確になっていないと思うんです。どれかの動物が真似をしてここまで発音できたというようなレベルの問題ではないと思います。

阿部：その事例をふと思ひ浮かべたものですから、先生のお話にどう関係づけられるのか、もしご意見があったらお聞きしたいと思っただけです。

司会(金)：田中先生、どうぞ。

田中：今のことに関係してなんですけれども、お話を伺っていると、言語の形成というのは言語形成するための条件の成熟した後の結果であって、言語の形成によって言語を形成する条件が作られたというわけではないんじゃないかと思えます。で、例えば「ボノボ」なんかには、確かに記号を色々教えることは出来ますけれど、それは既に出来ているある程度出来ている能力に基づいた強制的な教育で、強制的な教育によってこういう結果が得られるということと、発生的なプロセスでそれが出現するというこの間には、ものすごい大きな違いがあるんじゃないのかと……。

川上：私もそう思います。

田中：相対性理論を見出したのはアインシュタインだけれども、だけども今は非常に多くの方が相対性理論を学んで理解することができますから、その違いがあるのかと思うんですね。だから、いろいろな条件の成熟によってそこに発生するというのと、それから人為的にそれを形成するというのと、それはかなり大きな違いであって、両者を必ずしも同じことと言うことはできないんじゃないかと思うんですけど。

川上：非常に素人的に言いますと、発生するというプロセスは実は何十万年かかっているわけです。その経験の積み重ねというのがひとつあって、その間には環境の変化も色々あ

るでしょうし、その中でヒトという種族が生き延びて、生活しながらその中である条件が形成されたというふうに考えるべきだと思うのです。ですから、言語のそれがどういうふうに動物の発声と違っているのかというのは、ある意味では続いているんですね。連続的な身振り起源説というのがありますが、それも一面ではその通りだと思われる面があるわけなんです。ただ、身振り言語というのは非常に条件反射的で、運動器官に神経的には直接つながっている。つまり例えば、天敵を見つけた場合だと、感覚映像で天敵をみつけた、その感覚映像が直接運動組織につながって反射的に行動しているわけなんです。そういうのが身振り言語段階の特徴なんです。それが、先ほどから申し上げた言語的な行動になるのには、その間にギャップがあるわけです。そこをどう説明したらいいのかが問題で、完全に説明できるとはいいませんけど、私は言語と身振り言語とは違うと思うんです。条件反射的なものからやはり少し自立的なものになって言語というものを形成した、その言語というものの性質を、連続的に変化してきたというように説明すると、本当の意味の発見がないというか、何も説明されてないんじゃないかという気がして仕方がないのです。

田中：ちょっと質問なんですけれども、二枚目の資料の上の「道具行動と言語行動の比較」の表なんですけど、この表の真ん中の「言語行動」のところは第1段、第2段、第3段として、「《素言語》と《対象》の準備」から、第3段の「言葉を使用するコミュニケーション行動」ですね、でこの3つがまず論理的に、人類史のある瞬間をとってもこれが論理的段階だというのは非常によくわかるんですね。質問はこれが歴史的にどの程度段階的かということなんです。

川上：この3段階は歴史的な段階ではないですね。

田中：歴史的には、例えばその第1段階、第2段階、第3段階のその比重がだんだんだんだん変わってきたように見えるんですけど……。

川上：いや、そうではなくて、ひとつの行動、つまり言語行動が3段で構成されているということですね。

田中：それはわかりました。それから次の「間合い」なんですけれど、この「間合い」は聞いていると、主体が「観る」というそういう脳の中の行為と、それから《対象》といってもこれそのカッコがふたつついているからやっぱり脳の中ですね。脳の中の「観られる」という客体とのそのような「もの」と「こと」の間の違いがあるという以上にどういう意味があるのかということところがまだよくわからないんです。「間合い」と書いてあるところ……。

川上：「もの」と何ですか。

田中：「観られる」客体と何か「観る」主体というものと、この二つのことの違いがあるということはわかるんですね。その「間合い」というものはその違い以上に、違いということ以上に、どういうことを意味しているかということがまだよくわからなかったんです。

川上：おわかり頂けなくてもしょうがないと思うんですけど、例えば先ほどから言っている身振り言語の段階にはこういう図は書けないんですね。書けないと思うんです。言語、言葉になったということは、いろいろな《対象》が言葉で表現される、《素言語》で表現されるということで、音声で表現されると言ってもいいんですけど、それで表現されるわけですから、それだけヒトが外界に対して主体的になったと言うか、そういう変化がそこにあるんですね、それを心理的な「間合い」と言うふうに、あくまで心理的なレベルですけど、言ったわけです。この「間合い」は、昔から哲学などが問題にしてきた意識の発生とか、そういうものと関連付けて説明しないと、本当の説明にはならないと私は思ってま

すし、思考と関連付ける人も出てくるかもしれませんが。しかし、思考というのはやはり、ヘレン・ケラーの自伝の中にもありますが、感覚的なものでも思考はできる、思考すると私は思うんです、人間というのは、いや、人間じゃなくても。だから言語以前に思考というのは当然あった、いまの私たちも感覚的なことをベースにして考えてます。必ずしも言葉で考えているばかりではないと思うんです。だから、言語ができてはじめて思考が始まったという人はかなり沢山いると思いますが、私はその立場は取れない。最近の経験主義的な傾向はだんだん思考と言語を切り離す、あるいは意識の発生と言語を切り離す、そういう方向へ向かっているのではないかと、これからますますそうになっていくだろうと思います。主知主義の哲学にこだわっている人ほど、その考えからなかなか抜けられない。私の本を読んで、私の弟がやっぱりそこで引っかかったんです。彼の方が正しいのかもしれないけれど、言語以前に概念があるわけではないといきなりそう言うんです。確かに今までの主知主義の影響を受けてきた考え方というのはそういうものだと私は思います。私自身の中にもそういう考えがないわけではありません。しかし最近の動物の生態科学とか、いろんなところから出てくるのはそういうものとは違った結果だと思っています。

田中：僕は論理的思考は言語でなくちゃ成り立たないと思うんですね。

川上：ああ、論理はそうですね。

田中：他の例えば理解するだとか、認識するだとかそういうことは言語によって味付けられたと思うんですよ。

川上：ああ、それはおっしゃる通り。だから、思考という言葉をもどの範囲で理解するかということですね。

司会(金)：石川先生、どうぞ。

石川：手話って言うものがありますけれど、手話と身振り言語との関係はどう考えたらい

いのでしょうか。

川上：身振りは一般的にはそういう手話に近いものですね。

石川：身振り言語というのは手話……。

川上：いろんな身振りがあるわけですけども、最近のチンパンジーなんかの観察でもいろんな身振りをやっていますね。それでコミュニケーションをやっているわけで、私には手話の正確な定義がちょっとわからない、もちろんどういふものかはだいたいわかっているんですが、手話で相手に通じるというのは、いや、ちょっと待ってください、手話というのはしかし言語ですね。

石川：言語です。

川上：言語ですから、そこは違いますね、原初期の身振りとは。手話は言語だからやっぱり普通の言葉のコミュニケーション、その一つの方法として考えるべきでしょうか。

石川：その系統発生のプロセスの中で、例えば音声言語の前に手話言語というものはないんですか。想定できないですか。

佐倉：ないと思う。その流れの中間にあるものじゃなくて、言語をしゃべれる現代人になってから言語の代わりにできてきたと思います。身振り言語と同じではないと思いますね。

石川：全然違いますね。

佐倉：身振り言語は非常に起源が古い可能性があります。

狩野：ただ実験的にまあ、あの、顎だとかなんかの構造上、猿だとかなんかで、あるいはその他の動物で、音声構成できない、音声構成できない場合は、手話を使うと何らかのサインになって、その手話で向こうがいれば、動かさうる、こちらが発信しうるという実験はいくつかあります。そしてその手話の方がつながりやすく音声はだめだと。

川上：それは相手のからだに触ったりするのと同じでしょう。

狩野：そうですね。動物がいれば口の動きが

まだ自由でない場合は、手話的なかたちのほうが言語的なものの実験には使えるという報告がいくつかあります。

阿部：手話というのは、手話の方に聞いたことがあるのですが、自然言語であると、つまり、人間、もし音声言語とかが使えない場合には、その集団の中で自然発生する。ですから、必ずしもモールス信号とかあいう性質のものとは違う。代替用に完全に置き換えたものではない。だから、手話にも何々語、自然言語の日本語とか、何とか語とかいう様に、手話であっても様々なものがあるようです。

司会(金)：高村先生、どうぞ。

高村：ふたつお尋ねしたいことがあるんです。ひとつは、人間言語の起源を考える場合に、音声言語と文字言語とが結びつきをどう位置づけるかということなんです。それで、そのような人間言語の起源について、「物づくり」を通して原始技術の研究をしている和光大学の岩城正夫さんは、音声言語が道具のシンボル機能の発達（文字の形成）を助け、それが音声言語と文字言語の結びつく起源になったのではないかという想像をしています。つまり、一方で、道具を使用することによって、主体と対象との間がだんだん間接的になり、道具使用の計画性的行動がどんどん広がっていくにしたがって、その間をつなぐための想像力が発達していく、先生の言語の構造図でいうと主体と客体の間の「間合い」が豊かになっていくわけです。他方で、人間生活の場に、使用ずみのとっておかれた道具がたまってきて、その本来の使用目的が失われ、しだいに記憶を引き出す信号の役割をになってくるわけです。後者の「道具の記憶引き出し使用」は個人的で、弱いものであるが、それぞれが共通的で、強い音声言語の助けをかりて、しだいにそのシンボルとしての文字的側面が社会性をもった音声言語と結びつき、人間言語としての特徴を形成したと仮定できるのではないかといっているんですが。

川上：それはずいぶんと古いところの話ですね。

高村：ええ、そうなんです。先生のお話は、主として音声言語の起源だったように思うのですが、人間言語の特徴として、道具の起源とのかかわり、文字言語の起源とのかかわりをどんな風にお考えなのでしょう。

川上：文字言語というのは、言語が形成されたあと、だいたいたってからのことですが、ご質問はどのぐらいの年代のことをおっしゃっているわけですか。

高村：ええと、要するに人間言語は、音声言語だけではなしに、文字言語と結びついたというところにその特徴がありますよね。ですから、人間言語の起源を全体的に考える場合には、音声言語と文字言語の結びつきも視野に入れないといけません。

川上：言葉以前のシンボルというと、ふつうは身振り言語と呼んでいます。文字言語と言うのは適当ではありませんね。

高村：どのぐらいの年代かということは、わたくしもはっきりわからないんですけど……。

川上：音声以外、例えば道しるべに何かを立てるとか、物を使ってコミュニケーションするやりかたのことを言われているのですね。

高村：道具としてそのような使い方もあったでしょうが、文字の起源として相関が強いのは、むしろ道具からその使用目的を脱落させてその形だけを残そうとした絵みたいなものの方ですね。

川上：ああ、岩壁画が出てくるのはもっとずっとあとの時代ですね。

高村：もっとあとの時代のことですかね。でも、かなりまえからいろいろとそういうことがひんぱんにあったのではないですか。

川上：いや、3万5000年ぐらいより前にはあまりないと思うんです。

佐倉：文字言語の重要性というのは、文字の発明は人間の歴史のうちでごく新しいものですが、現代人では非常に重要です。言語

活動というのは現代生活では文字がなければ成り立たない。それで、言語をコントロールする脳の中核は従来から二つあるということがわかっておりまして、後言語野(ウエルニツケの中核)という聴覚性のものと前言語野(ブローカー中核)という運動性のものです。耳で、言葉を聞いた時に理解できるためのもの、運動性の方は言葉になる音声を発音する、発声するためのものなのですが、最近第3の言語野というのが見つかり、これはペンフィールドの中核というのですが、頭頂の近くにあります。これの機能はまだよくわからないのですが、もしかしたら文字言語の中核ではないかともいわれています。ちょっと付け加えて置きます。

川上：言語が文字になるというのはずっと新しい時代のことで、それ以前に岩壁画があって、動物がよく描かれたりします。あれはもうすでに感情的な表現とか、非常に現代人に近いものを表現しているわけですね。それまでの時代とは違っているわけです。この、ものによって何かを表現する、自分の感情を表現したり、何かを知らせたり、そういうことをするのは非常に大きな進歩なので、それがどの時期から始まっているのか、これは私もまだ全部を調べたわけではありません。

佐倉：残っている証拠から言いますと、いわゆる絵画、彫刻の類ですね……

川上：そこがやっぱり始まりですか。

佐倉：はい。洞窟に壁画を描いたり、あるいは動物の角や何かを刻んだりして絵を描いたりして、ああいういわゆる芸術作品というものはですね、わりと新しく後期旧石器時代、つまり新人の時代になってからです。

川上：だいたい3万5千年前といわれていますね。

佐倉：それ以前にはまだ見つかってないのです。

田中：私も3万5千年くらい前からだとうかがっているのですが、そのような新しい時期

に始まった活動のための脳の部分がたった3万5千年ぐらいで解剖的所見でわかるほど変化できる、検出されるんですか。

佐倉：それはわかりませんね。骨しか残っていないと、その頭骨の内面を見てもその人が何やってたのかまではちょっとわからないですね。

田中：骨の特徴あるいはそうかもしれないという特徴が残るほど形成されているわけですね。

佐倉：どこかにあるんじゃないかという感じがする。しかし脳の機能は生まれてから後に大きく発達します。生まれつきは変わらないんだけど、生後の学習によって非常に変わることがあるわけです。

田中：生まれてから形成されたのではないのですね。

佐倉：ええ、それだけでできているのかわかりませんが、本質的に生まれつきの脳の構造より、その後の経験が違うんですから。

田中：ああ、そうですか。

佐倉：後期旧石器時代の人々だって勉強しています。子供を集めて絵を教える先生がいた、そういう形跡さえ残っています。

田中：塾の歴史は古いんだ。

佐倉：それから言語に関して言いますと、言語中枢のうちのブローカ前言語野、運動野という、あそこがですね、骨を見ますと左右で膨らみ方が違うという、そういうことが多分あるんじゃないかと言う人がいます。反論もありますし、骨からでは何とも言えないと言っている人もいるし、左右違うけどこれは言語と関係があるかどうかは確認できないなんて非常に慎重な事を言ってるんですが、私はあるんじゃないかと思っています。それが明らかに出てくるのはやっぱりネアンデルタールの例がありますね。それにちょっとおうかがいしたいんですけども、川上先生のお書きになった本で、言語領域が発達した形跡が50万から60万年前とありますけど、こ

れは何に基づいた数字なんですか。

川上：それがだれの報告かというのは、いま控えがありませんので。

佐倉：これは人類学ではまだちょっとあまりはっきりした証拠を見つけておりません。

川上：そうですか。

佐倉：私はだいたい言語の起源は古いと思っていますから、50万年、60万年前でいっこうに差し支えないという、人類学的なあらゆる知見を総合した結論を持っておりますが、はっきりした証拠が欲しいんですね。

川上：言語については証拠が非常に少ないものですからね。

佐倉：従来はですね、ネアンデルタールというごく新しい人類すら言語がほとんどなかったという説が非常に世界に広まっちゃってるんです。有名なりバーマンの説以来です。

川上：それはもう間違いですね。

佐倉：化石の証拠からして骨を組み立ててみると、発声器官が足りないというわけですよ。私はそれに反対してまして、前に研究班が組織されたことがあって、「化石人類を含む霊長類の発声器官復元」という題の共同研究がありまして、化石人類を担当してやったんです。私の復元では、ちゃんとですね、ネアンデルタールも現代人並みの音道を確認できるんです。

川上：ああ、そうですか。

佐倉：私の復元が間違っているとは考えておりません。それから、私がそういった結論を出したその直後に、とうとうネアンデルタールの舌骨が発見されたんです。舌骨とは非常に重要な骨でしてね、特に音声活動にものごく重要な位置を占める。小さな骨ですからなかなか残らない。舌骨の位置にも問題があるという、そのネアンデルタールがだめだといった先生は、舌骨がうんと上にあると、下顎骨の中に入り込むくらいに上にあると言う。そうすると音道がすごく狭くなる。他の動物並みになってしまう。サル並みになっ

ちゃって人間並みの音声はととも出ないという結論になってくるのですが、ところがそういうサルと人間の舌骨の形は全く違う。人間はだいたい喉頭が下に下がっているという特徴があり、サルに比べてずっと下がっている。舌骨の形も違い、これは、言語に関係があるのです。舌骨を見れば言葉をしゃべっているかわかるといってもいいぐらいです。で、とうとう出てきたネアンデルタールの舌骨は現代人とそっくりなんです。それで私がかねがね主張していた、ネアンデルタールは現代人に似た言葉がしゃべれたという主張がほとんど裏付けられたのです。

田中：ジャワ原人や北京原人……。

佐倉：原人ぐらいいでも私はかなりしゃべりだしていたと思いますよ。それでないとおかしい事実が色々と考古学的に明らかになっていると思います。

川上：それは、原人時代の後半のことですね。原人時代はもっとずっと上まで溯りますが……。

佐倉：新しい方はどのくらいとお考えでしょうか。

川上：新しい方は30万年くらい……。

佐倉：ひとつの証拠はですね、やっぱり脳の話なんです。脳の言語中枢というのは大部分が左側にありますよね。その感覚性の言語中枢、側頭葉の聴覚野の周囲にある、その中枢の左右の脳半球のうちでは、言語中枢は左よりにある、その部分の左と右で脳の構造が違うんじゃないかとみんな思うわけなんです。そこで一生懸命昔からいろんな人が切片を切って顕微鏡で覗いて細胞の構築が左右で違わないとか、さんざん調べたんですが、どうもはっきりした結論が得られない。ところが最近になりまして、ある学者が、そんな面倒くさいことをやらないで、その辺のところをはがして、メスの背中あたりに削いでみたら、そうしたらはっきりした左右の差が目に見えて出てきたのです。

田中：それはどういう……。

佐倉：それはですね、ある、削いだ時に出てきます側頭面という、脳の表面の形が右と左で違うんだということが分かったわけです。

田中：表面の形といいますと……。

佐倉：この、周りと境された特別の領域が肉眼ではっきり見えるわけです。それが右と左ではっきりと違うという事がよくわかります。まだね、違いというのが果たして厳密に言う、言語中枢に対応しているかどうかという証明は難しいと思います。死んだ人で調べているわけだから。ところがですね、大部分の人間で脳の両側で違っているという、左右の差が言語中枢の存在によることは認められます。だから、左右の差に対する一番もっともらしい考え方は、これが言語中枢であるから違うという事になりますよね。それを今度は日本人の学者がですね、新生児、生まれたての赤ん坊の脳でやってみた、するともう差があるんです。言葉なんか全然習ってない生まれたての赤ん坊でも言語中枢の部分で左右の差がある。これは大変な事でした、そんな遺伝的なものは言語が新しければできるもんじゃないですよ。だから言語の起源は私は非常に古いと思います。

高村：それから、もうひとつお聞きしたいのは、人間言語と社会の形成との関連についてです。人間の社会性の起源について、フランスの心理学者ワロンは、「言語をはじめとして、知的生活の不可欠な道具には、当然、人間的環境問題の存在が前提されているが、この人間的環境の最初の条件のひとつとして、情動生活をあげることができ、その情動の本性が人間相互の情意的共同性の保持と多様化にあることから、情動が潜在的に表象・意識活動の共同性を保障している」という意味のことをいっております。したがって、人間の音声言語の社会性も情動のもつ社会的本性に根ざしているということになります。ただ音声を人間相互のコミュニケーションとして利

用するためには、音声に連動していた情動反応やそれと条件反射的に結びついていた情動を、音声とイメージとの強い結びつきをそのまま保ちつつ、切り離さなくてはならないんです。実際に、人間の場合には、情動は視床下部と前頭前野の2種類の神経中枢の間で密接なつながりをもってはたらいっていることが知られているんです。

川上：それが社会性だと……。

高村：ええ、それで言語と社会の形成との関連ですが、社会の形成の前段には、長いこと情動にもとづく音声によるコミュニケーションが先行してたと考えられませんか。

川上：音声によるコミュニケーションは、身振り言語の時代が長かったわけですが、そのあとの言語も社会の形成よりは少し先行していただろうと思います。うんと先行していたとか、そこまではちょっと言えないと思うのですが、論理的には言語の方が先でないとおかしいし、あるいはほぼ同時に進んだかもしれないという風に先ほど申し上げたわけです。

高村：ああ、そうでしたか。

川上：まあ、そういうふう非常に密接な関係は確かにあるということですね。しかし、情動を抑制するのは確かに社会的なひとつの要素ではあると思うんですが、そこはもうちょっと色々な要素を考える必要があります。

高村：音声を音声言語として人間相互のコミュニケーションに使う場合、音声にともなう情動を制御しないと使えないのでしょうか。

川上：言語については、情動を抑制している一面がたしかにありますね。

高村：たとえば動物の場合でも、群れに危険を知らせる叫び声を発するたびにいちいち条件反射にビクビクしていたのでは、相互のコミュニケーションに使えないのではないで

しょうか。

川上：いや、コミュニケーションはやっぱりやってるわけですね、その場合。

阿部：やってるんですけども、そういうコミュニケーションと、危険を知らせるコミュニケーションと、普通の意志疎通を図るコミュニケーションと区分けしていくという事が必要で、そのために抑制機構が働くといいますね。

川上：抑制機構が働くという事は、言語に結び付けておっしゃるのは、私はいま初めてうかがったんですけども、身振り言語と区別するという意味ではその通りだと思います。

阿部：ああ、そうですか。

川上：社会の形成のなかにはそういう情動的なものの抑制というものが当然入ってるわけだと思いますね。

阿部：そうですね。それを言語と結び付けようという事らしいんですけども。

川上：そうですか。私が申し上げた「間合い」というのも、そういう情動の抑制という面から見ることはできますね。

佐倉：いまおっしゃいました、この社会性という言葉ですけども、これはちょっとご注意されないといろんな意味を持っているので……

川上：ええ、それはわかります。

佐倉：霊長類学者などは「サルの社会」なんて平気で使っておりますし、サルだけでなくあらゆる動物にも使っておりますし、昆虫でもアリやハチは社会性昆虫といっております。

川上：社会性的動物っていうようにです。しかし、社会性動物と言う場合は、人間社会の概念が先にあって、それを借用しているだけだと思います。

佐倉：そこを明確に言うと、人間的なある程度の社会ということなんでしょうね。

川上：それは、人間社会というパターンが先にあって、それに似てるからというので社会

性、社会的昆虫とか言う。同じような事をやっていますからね。集団で役割分担があって、協同作業をやっているわけですから。そういう社会的昆虫という呼び名は、人間社会という概念が先にあるわけですね。それを使っているだけなんで、それじゃあその二つがどこまで似ているのかって話になると、その境界線っていうのは必ずしも明確になっていない、明確にされていない……。

佐倉：ただ、社会という言葉では人間の方が古いて事は確かですよね。社会という概念は人間社会から出来てきたことは確かで、それからさっきどなたかが言っていました意識なんて言葉、これは昔は人間以外には意識なんてないと思い込んでいたわけで、ところがいまはそうでなくて、いろんな所で人間以外の動物を全体的に見渡した場合には、従来人間だけに使っていた言葉も本当はつながりがあって、他の動物にまで、あてはめられるんだという風になってきているんじゃないでしょうか。

川上：だんだんそうになっていくんじゃないでしょうかね。

佐倉：ある程度限定しないと、社会性という言葉が怪しくなってくる。人間社会より動物一般の社会が先立つようなことは起こって来るとは思いますが。

川上：それはおっしゃる通り、注意しなければいけないことで、特にあのミツバチやアリぐらいの社会性とですね、人が社会的、人が社会を形成したという場合の社会とはどこにその特徴の違いがあるのか、私はそれがメインテーマだと思っているんです、ひとつの。それから、それを何でもって示すかという事は、私は現在作業中でありまして、まだ答えは簡単に出せないですけども、非常に大きな問題です。社会と言語、それから動物、この三者の間の関係は非常に重要だと思うんですね。それをただ独立にどれか一つだけ捕らえて何か言ってみても、これは総合的な判断に

なっていないわけで、それではまずいと思うんですね。

田中：動物の社会というかわりに動物の共生体という言い方などもどうでしょうか。共生組織、共に生きる……。

佐倉：本質的に基本は同じなんだというような概念にたてば、基本的に言葉も同じになるでしょうね。

田中：基本的には何だというところの前に、いずれも共生体であることには相違なくて、その上で人間には人間特有の特徴があって、それはやっぱり社会という用語で表現するような特徴があるのではないかということとも思えるんです。だから、その辺のことをはっきりさせないで社会という言葉を一一般に使うのは危険かと思うんですね。

川上：一番簡単に言うと、動物の社会というのは遺伝子的に規定されている、全部、その通りにからだが行動している。ところが人間の方の社会はちょっと違って、少し勝手な行動をしている、進化だけに頼らないで自主的な行動をしている面があるわけです。だからそこをきちんと説明できればいいと思うんですけれど、説明できる言葉がうまく見つからないし。

佐倉：道具と言葉の関係は非常に大事だと説かれました先生のお考えはもっともだと思います。さっき差し上げましたのは私の前に書いたもののコピーですが、あれにもちょっと触れてあります。

川上：ああ、そうですか。あとで拝見させていただきます。

佐倉：人の特性という章（雄山閣「人類学講座」）について書きましたのですが、その中に、一側優位性という概念の元に、言葉の問題と手の使用、利き手の問題を書いてあります。利き手がどうしてできるかという、それが人間らしさにどういう関係をもっているかということについてです。

川上：言葉が道具だということは、ずいぶん

昔から言われてきているんですが、その正確な意味ははっきりしていないんですね。ただコミュニケーションに使っているから言葉も道具だというだけなら、それで石器だとか土器だとかと同じように道具だということは言えないと思うんです。それよりもっと深い意味があると思うんです。それはやっぱり人間が作り出したということに関係があって、非常に長い時間をかけて言葉も作ったし、石器も作った。そういう観点から両方が似ていると言わないと、ただ何かの目的に使っているのは同じだよというだけでは、これは似ていることにはならないと思うんですよ。

田中：いまの点なのですけどね、生物の進化では、たまたま出てきた条件が進化の契機になっているということが色々あるかと思うんです。最初石器を使い出したのは自然にあるものをそのまま使ったかもしれない。しかし、そうして使った石が実は工具にもなり得たと、そういうことは経過としては自然的な発展でありながら、人類史の上では実に大きな意味を持っていて、よくまあ石器を使い出したなど、工具にもなりうる、ある段階では工具にもなり得た石器を自然の中から取ってよく使い出したものだという気が非常にするので。

川上：おっしゃる通りです。しかも、自然に工具を使い出したということが問題のポイントなんですよ。

田中：そうそう、自然なことだと思います。

川上：固いものを割るために石にぶつけるといことは動物もやってる、鳥もやってるし、皆やってるわけですから。いわゆる猿人とか原人とかいわれるものも、同じことをやっていたと思うんです。それがあつた時に、固いクルミの殻を割るんじゃなくて石を割った、わりと自然な発展なんですよ。

田中：そしてその瞬間に工具が誕生した。

川上：そうなんですよ。そこが自然な発展だということが非常に大事だと思うんです。

司会(金)：まだ時間はありますが……石井さん、どうぞ。

石井：札幌学院の石井です。私このレジュメを読ませていただいているのですが、言語という語をちょっとピックアップしてみると、これは人間の持つ自然言語の特質でないような気がするのですね。ここで求めている言語の定義に関して言えば、動物が用いている言語と変わらないという気が私にはするのですが。例えばサルにしてもイルカにしてもなんでもいいんですけれど、何かを発声した場合に、それをAとB、Aが発声しBが聞いた場合、「危険だ」とか「敵だ」とか、ということを理解するっていう意味で言えば、それは人間に限ることではないと思いますがいかがでしょうか。

川上：おっしゃる通りだと思うんです、そこは。ただ、動物の場合は、それが行動と直接結びついてるんですね。だいたい敵であるか、獲物であるかを識別するというのがまず、大部分ですね、動物の場合は、もちろんお互いの肉親関係の間の、呼び声みたいなものもありますけど、直接結びついてるんですね、運動、行動することと。そこが違うと思うんですよ。だから身振り言語と言語とがどう違うかというのもやはり同じ事で、言語っていうのはまさにすぐに反射的に行動しないよという、そういう意味での人間になったという意味合いがあると思うんですよ、言語の発生には、そこがちょっと強調が足りなかったかもしれないですけど……

石井：ですから、例えばシンボル化能力だとか、いまここにないものをリプレゼンするっていう意味で、人間の言語の持つ特殊性を限定したりする場合はありえるのではないのでしょうか。

川上：それはしかし、言語が発生して、発達したのちのことです。いま私がここで話したのは発生の時のことなので、まだそれほど

複雑な言語ではないんですよ。

石井：そうすると、いまお話しした、動物が持っている、そのダイレクトな身体行動をもなう言語の発生と変わらなくなるのではないかなという気がするのですが。

川上：いや、だから、変わらないんだったら、おっしゃる通りまだ変わらないんですよ。それこそ、まだ人間にならない段階なんですよ、そこは。

石井：はい。

川上：そこのところがどういう風が変わっていったかというのは、確かに説明不十分だったと思うんですが、しかし、区別するとすれば、やっぱり言語の特徴というのは今日話したようなことが特徴であって、身振り言語とは違うわけですね。身振り言語のことは今日はあまり申し上げなかったんですけど、ただ、似てる面は確かにあるんですよ。お互いに同じコミュニケーション手段ですから、似てるところはあるんですけれども、しかしどこで違ってきたのかと言えば、やっぱり「間合い」ができたというところで違ってきたと思うんです。そこに自立性ができているんですね。動物とか、前人とかは、本当に対象を対象として認識しているのじゃないという言い方をしたらどうですか。彼らはちゃんと認識する前にもう行動しているわけですね。行動と対象とが結びついてるというよりも、行動と呼び声とか叫びとかの音声とが結びついているんですね。そういう言い方は少し大ざっぱですが、区別するためですから。

石井：やっぱり相手がいるのがちょっとわからないですね。

川上：それは何回も言うように説明不十分ですから、そう思われるのはやむをえないと思いますけど。

司会(金)：そろそろ時間ですので、議論の場を懇親会の会場に移りたいと思います。どうもありがとうございました。